



ニカラグアで行われたワークショップ。その国の制度や文化に合わせた内容を教科書に取り入れるようにした



中米5カ国で教科書作りに携わったメンバー。西方専門員は、リーダーを務めた

西方専門員は、「ホンジュラスでも引き続き教材を有効活用するための教員研修などが続いているので、昼間にその仕事を終えて飛行機でエルサルバドルに行き、翌日までにホテルで資料をチェックして……ということ

もありました」とハーダナ日々を振り返る。「一番変わったのは、先生たちのモチベーションが上がったことです。現在、教育省の政策アドバイザーを務める中原篤史専門員も、新しい教科書の効果を実感している。実際、小学校の卒業率も年々上がり、目に見える形でも効果が現れているからだ。教材開発の重要性を認識した教育省は、スペイン語や理科の教材を自ら作成するなど、確実に変化が生まれている。

さらに、小学校の教員養成校では、日本の協力で作成した指導書の習得を卒業要件に取り入れたことで、本当に指導力のある教員を育てていく環境が整った。しかしその一方で、まだまだ課題も盛りだくさんだ。「優秀な先生が就職できずに失業者として国内に留まっている。採用計画の策定など政策レベルでも改善が必要。根気強く支援を続けていきたいと思っています」と、中原専門員は力を込める。

中米地域以外の国からも、関心が寄せられている日本の教材開発のノウハウ。子どもたちの豊かな学びのために、まだまだ多くの可能性を秘めているそうだ。

ホンジュラスのマルロン・エスコト教育大臣と青年海外協力隊。学校で算数の授業をサポートし、教科書を根付かせるための活動を続けている



ジュラスをはじめさまざまな国で活動してきた。留年、さらには中退に追い込まれてしまう。そんな子どもたちを前に、政府は今から10年以上前、ある決断をした。算数の教科書を一新しようというのだ。それまでの教科書は説明文ばかりで、児童の学ぶ意欲が薄れてしまつてると感じたからだ。また、新しい教科書に合わせて指導書も作り変え、先生の指導力を向上させようという狙いもあった。

に、さまざまな工夫を凝らして教材を作る技術が優れているのです」と、西方専門員は日本の強みを説明する。日本人専門家と、ホンジュラスの教育省や教育大学の職員らが共同で作業を進め、現地側が苦手とする分野については研修を行うなどして知識を蓄えた。説明文に沿って図表を加えるなど、日本の教科書の表現法などを伝えるうちに、現地のメンバーにも「分かりやすい教材」を作るという意識が生まれてきた。その一人が、教育大学で働くルイス・ソトさん。「今までの教科書の問題点をしっかりと見直そう」と、創造的なアイデアを次々と出してくれるようになった。

世界で関心が広がる 教材開発のノウハウ

あつという間に2年がたち、ついに新しい教科書と指導書が完成した。子どもにも先生にも使いやすい点が評価され、国が指定する教材としても承認。全国の小学校に配布されるようになった。同じくスペイン語を公用語とする他の中米地域からも注目を集め、エルサルバドル、ニカラグア、グアテマラ、ドミニカ共和国でも、日本と連携して、新しい教科書作りが始まった。

「この立体的な展開図を考えてみましょう」

その国に適した 質の高い教材を

2時間目、算数の授業が始まった。先生が手にしているのは、紙で作った立方体。「実物があるイメージしやすいよね」。5年生

の子どもたちにも好評だ。ここはホンジュラスの首都テグシガルバにある小学校。算数の授業には、いつも楽しく学べる工夫がたくさん詰まっている。2010年、現地の教育省が好きな教科を調査すると、ほぼ半数が答えたのが「算数」ところがその3年前、その割合は3割にも満たなかった。

「ホンジュラスでは、小学校でも進級テストの成績が悪いと、留年になってしまいます。主に足を引く張っているのが、算数とスペイン語です」。こう説明するのは、西方憲広JICA国際協力専門員。10年近く日本の小学校で教えていたが、開発途上国の教育支援に携わりたいと退職を決意。ホン



ホンジュラス北部の街テラにある教員養成校でも、日本の協力で作られた指導書を活用。特に教育実習の時には手放せないアイテムだ

算数が好きになる 教科書を作りた

カリブ海に面した中米の国ホンジュラス。小学校では子どもたちの元気な声が響くが、6年間で卒業できるのはなんと約3割。こうした状況を打開するために生かされているのが、日本の教科書作りのノウハウだ。



ホンジュラスの小学校の教科書(1年生)では、お金の数え方や計算問題が充実。登場するマスコットキャラクターは、ジェンダーに配慮して、人間ではなくオリジナルのイラストが使われている



テグシガルバ

from
ホンジュラス
Honduras